

私が日頃からこのような人間で有りたいと願う時のキーワード、それが「有源の井水」である。

私が敬慕・私淑する安岡正篤先生著「人生をひらく活学」(PHP 文庫) からこの言葉を取り上げる。

陽明学者王陽明の著「伝収録」に「与其為数頃無源之塘水、不若為数尺有源之井水 生意不窮」(同巻上)の一説がある。

- ・「頃」は中国の地積の単位で 100 畝 = 9917.36 m²、仮に 3頃 = 9917.36 m² × 3 = 29,752 m²、 $\sqrt{29,752} = 172\text{m} \times 172\text{m}$ (四方)

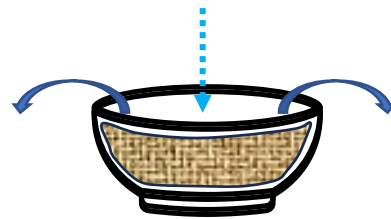
- ・塘水 = 溜り水、生意 = 生き生きとした様子、窮 = 行き詰まって身動きが出来ないこと。

直訳的には、一その数頃の源 無きの塘水とならんよりは、むしろ、数尺の源有る井水の方が、生意窮まることはない。その意識は、人間の生き方というものは、「どんなに広くても、堤防で囲まれた貯水池のようなものであってはいけない。どんな大量の水であっても、停滞して淀み腐敗しそうな水、腐敗した水は、水としての価値はない。それよりも、例え小さくても狭くても浅くても、尽きることの無い清く活きた水が滾々と湧き出る源を持つ井戸水のようにあって欲しい。」であろうか。

「源 無の溜池の水よりも、源の有る井戸水であれ。」(溜池より井戸) という先生から授かった人生の命題である。私の想像で次への展開、イメージ図化すれば、王陽明は図-1のように言いたかったのではないかと思っている。

同図1の溜池は、頑丈なコンクリート擁壁の構造で、溜まる水は腐敗し塵埃が沈殿して行く、一杯になると汚れた水が溢れ出て行く。擁壁からは一滴も漏らさずと、まさに防衛態勢の強い頑迷固陋の象徴でもある。

同図2の井戸では、地下を掘ったそのままの構造で、底部から滾々と清水が枯れることなく湧き上がる。一杯にならない内に途中の土壁から漏水する、自身の知識・能力をどんどん公開・共有して行くことの象徴である。



図(表) - 1・1



図(表) - 1・2

私は「分別知」界に生きている人間の限界、有限知というものをまざまざと自覚するに至っている。一方で、理想郷「無分別智」界を求めて向上心もある、しかし、喜怒哀楽で右往左往乱高下する私は、ままたず藻掻いている毎日である。そう言いながらも、「有源の井水」の滾々と湧き出る活水源を自ら掘り当てたく暗中模索・悪戦苦闘・試行錯誤の毎日である。

その「源」については、次の二つを視野に置いている。

一つ目は、歴史上の(※1)大人物の伝記、(※2)碩学・聖賢・英哲の書・良書・啓発の書、根本經典の書である。私の日々の暮らしは同じ状況の繰り返しでマンネリ化へと自然な動きとなる、そうすると、溜池化する、すると思考が固まって来るのを自覚する。すると心身の純浄化が疼き、良書を求めるようになる。こんな考えの延長線上に読書大好きで晴耕雨読の日常となっている、そして運動性を求めているの山行きや旅行きである。会社現役生活においては仕事に係る専門書を相応に読むなど毎日が仕事漬けではあったが、そ

ういう本だけでは飽き足らず、安岡正篤先生の本も欲しくなり詠んだものだ。

(※1) 幕末維新の勇敢な名士ー吉田松陰、西郷隆盛、坂本龍馬、新渡戸稲造・・

そして、安岡正篤先生；1898(明治 31) 年 2 月 13 日～ 1983(昭和 58)年 12 月 13 日／日本の
易学者・哲学者・思想家。

(※2) 思想的には、武士道、国学・儒教（孔孟）・道教（老莊）・禅、四書五経、仏教、神道、キリス
ト教・・

このような良書に触れていると、感涙（感激、感動の涙）が涙もなく、止めどもなく零れるのを覚える
時がある。私は世間一般で言う処世術のノウハウ本には関心がない。前出安岡先生は「純真なる魂は英哲
に私淑す」と諭される、本来万人に純真なる魂は埋め込まれているのだから私のここでの吐露は格別のこ
とではない。

二つ目は、地域コミュニティにおいて求めるのは、向上心・向学心があり、対等互啓（恵）・共存的互
恵で対峙出来る至誠・正直の人、「澆刺とした創造力、進取気概」のある稀有な人である。私が敬慕・

私淑する安岡正篤先生が説く「一灯照隅」を行じている人に魅力を感じる。思想を語り人生観を語る人
である。

・・

私の性格付けの根底にある思想信条は、若い頃から政治的には純粋な無党派である。選挙権を得てから
の棄権は 1・2 度あったかもしれないが、その時の社会情勢を踏まえて、良心に従い投票して来た。一党
一派に従属・屈従は、偏執に洗脳されて「有源の井水」を阻害すると思っている。若い頃から宗教
的には全くの無宗教者である。「崇仏敬神（宗教）＝偶像崇拜」と断じている者である。他方で神社・仏
閣が大好きであるが、それは、生身の人間が介在しない崇高・純粋な神・仏の世界観が大好きなのだ、天
から垂れる神様の教え、天から垂れる仏様（仏陀）の教えが大好きである。一宗一門に従属・屈従は、
偏執に洗脳され「有源の井水」を阻害するものだと考えている。

ここで安岡正篤先生の本から「灑掃（しゃそう）」が浮かんだ、灑は、水・涙・汗・血・液体などを一
面にむらなくまく、かける、ふりかける、注ぐ、洗うの意味があり、「心の灑掃」に心掛けなければなら
ないという。私は思うに洗心という言葉もあるが、灑掃心もいい、水とは真水ではなければならない、
[殺菌剤・防腐剤・消毒液]（無益な雑）が入らない真水、そういうものは表層的には有効・有用に聞こ
えるが、心の深層域、すなわち、もう一つの見えない宇宙・深層無意識層・ZPF に沈殿し残滓が岩体化
する、それが後に悪さを仕掛ける悪魔と化す。

何事に付け批判的・消極的で、後ろ向きな人、ましてや「佞人・奸人・佞奸」「増上慢」の臭いのある
人、胡散臭い人には一切近付かないことにしている、そういう性格の人はつまらない、面白くない、妙味
が無い、別れた後に何も残らない、学ぶ処がない。私は悪友を作らないためにグル・タマリ・ムレな
い。私に心の栄養素をおすそ分けしてくれる「有源の井水」的善友を求めて人生している。

この「有源の井水」は「一方向の川流れに見る弊害」(No04) と真逆の教訓がある。

(end)